

1. 会議名称

杉並の教育を考える懇談会（第3回）

2. 日時

平成12年6月13日（火） 午後6時30分～8時30分

3. 場所

区役所中棟5階 区議会第3・4委員会室

4. 出席者

委員

生重、大東、小林、薩日内、高瀬、長谷川、林、平林、松丸、森田

石川委員は都合により欠席

幹事

教育委員会事務局次長、庶務課長、学務課長、指導室長、社会教育スポーツ課長

事務局

教育委員会事務局参事（特命事項担当）、副参事（特命事項担当）、庶務課庶務係主査

5. 会議次第

（1）開会

（2）前回会議録の確認

（3）本日の懇談テーマ

学校で子どもたちが「生きるよろこびいっぱい」になるには

（4）今後の日程について

（5）閉会

6. 会議録

会長 ご多忙のところをお集まりいただきまして、本当にありがとうございます。第3回を開きたいと思います。

前回申し上げましたように、私はいろいろなことを考える場合に、子どもの側に立って考えるにはどうしたらいいだろうかという立場から、突飛かもしれませんが、流行りのシステムとか情報などという考え方で考えたら、いろいろなことがきれいに整理できるのではないかと思ってお話したわけです。私は実は昔からそういう考え方を体系付けたいと思っておりまして、そもそもはイギリスの有名な神経学者が言い出した考え方で、それを私なりに整理して子どもたちの問題を考えたいと思ったわけです。

そのような考え方から、私は本も書きましたし、小児病院の現役時代に、愛知教育大

学の特設教育研究協議会で話したのも、資料として今日出しております。前回、子どもたちに生きる喜びを与えるにはどういうやり方があるだろうかということで、いろいろなご意見を出していただきましたし、私もそれを見て自分なりにどうしたらいいかと考え、整理したものを、委員の先生方には予めお渡ししてあると思います。今日はその中で、第一に、それを中心に今後の懇談会を進めていきたいと思います。いろいろなことを始める前に、前回の会議録の確認について事務局からご説明いただきます。

副参事 いまお手元に前回の会議録を置いてあります。そちらについて、大変申し訳ありませんが、お持ち帰りいただきまして、20日ぐらいを目処にご訂正箇所がありましたら、事務局のほうにお寄せいただきたいと思います。

会長 それでは、今日の懇談を始めたいと思います。「討論テーマ(案)」の第1の「学校の授業の人間化」というテーマでお話をしたいと思いますが、いかがでしょうか。

それでは、第1の「学校の授業の人間化」というところで、授業、指導内容、形態、エドメントというように分けてありますが、それに関連する資料の説明を教育委員会からお願いしたいと思います。

指導室長 それでは、簡単に資料についてご説明いたします。「平成12年度杉並区立学校の教育活動資料抜粋」です。このことについては、公立学校は教育課程を届出という義務があって、平成12年度はどのような教育活動を公立小学校、公立中学校が行おうとしているのか、また今日の「学校授業の人間化」という議論を進めていく中で、何かご参考になればということで資料提示をさせていただいたわけです。

特に1番の「上級生が下級生を教える方法の導入等」とありますが、このような部分については、「特色ある教育活動」の小学校の2枚目の5番ですが、小学校においては、異学年交流はかなりのパーセンテージで校内で行おうとしている、というデータが読み取れるかと思えます。

3番に「学校授業の身体強化。スポーツ、遊び、体験学習等々と書かれていますが、ここの全部のご質問、もしくは提言していただいているところに当てはまるかどうかは分かりませんが、1つの面として捉えて体験的な学習部分については、小学校では各教科でも「ア、イ、ウ、エ」の「エ」の辺りに、体験的な学習活動を取り入れて教科を運営していこうという学校も相当数に上がっています。

また資料の3枚目の部分について、中学校においても指導の重点については、小学校と同様に体験的な学習を取り入れた学習を新しく展開していかなければいけないということで、かなりの学校が重きを置きながら教育活動を推進しようという点を読み取れるかと思えます。

4番目の「学ぶ喜びいっぱいにして - 基礎学力」では、基本的な学力、具体的には「杉並方式、読み、書き、計算」と書かれていますが、この辺について、各小学校においても、子どもは読み、書き、計算という部分については、子どもにとって必要な最も基本的な学習を行うというように理解しています。そういう意味では小学校の各教科の「ウ」の「基礎・基本的な内容の重視と徹底」ということについては、最も高い位置にパーセンテージが上がっています。どの学校もここには非常にウェイトをかけるのだ、ということが読み取れるという観点です。

また中学校においてもそのような形の中で、「指導の重点」で「各教科の基礎・基本の精選」と、どのようなことを生徒たちにきちんと教えていくかということはしっかり考えて教えていかなければいけない。当然この部分には指導法の工夫、その他いろいろな取り組みがあると思っています。最も高い数字で、教科で押さえないという数字が見えるかと思っています。

5番目の「メディア機器に関する教育の推進等」ですが、この辺はコンピュータの関係、情報通信ネットワークの部分かと思えます。その部分では授業の中でも杉並区ではコンピュータ等の導入は行われております。小学校の1頁の「各教科」の中でも、「キ」で「コンピュータや情報ネットワークの活用」とあり、まだパーセンテージはそんなに高くありませんが、いまの杉並区の現状では、コンピュータそのものは総ての学校に導入していますが、ネットワーク化はこれから推進していくということで、ここは平成11年度が6校、平成12年度は今後6校に順次入るとのことですので、当然全校に当てはまるわけではありませんが、ご理解いただければと思います。また中学校においても「指導の重点」の中で、コンピュータや情報通信を7校はやっていこう、力を入れるという意味合いがあります。

6番の「グループ形式」とか「総合学習形式等々」がありますが、学習の改善という視点で見ますと、教科で小学校の1頁目には、「オ」の部分に「授業の改善、指導法の工夫、指導形態等々」で力を入れながら教科経営を改善しようというところが読み取れるかと感じています。

また今年度から小学校も中学校も「総合的な学習の時間」の導入の移行措置に入ります。

す。それに伴い、今後さまざまな学習の形態が、小学校や中学校に出てくると思われる。また、それがあある意味では各学校の特色に繋がっていくものに発展するかという感じはしています。その中でも学校だけでは出来切れない、地域の実態、学校の実態、生徒の実態等を含めて、地域の人材活用などは小学校においては1頁の(3)の「総合的な学習の時間」の「才」辺り、「地域の環境や人材の活用をしていかなければいけない」という所に高い数字が見えるように思います。

また中学校においても4頁目等に、かなり総合的な学習の時間の中で、地域の環境、人材の活用については、今後考えながら、学校の中を活性化していこうという部分が読みとれるかと思ひます。

また、それぞれの道徳、特別活動においても、「家庭や地域の人々との連携等」においても、それぞれの学校がかなり目を向けながら教育活動を推進していきたいということが読み取れるかと思ひます。資料については以上です。

会長 最初から資料の説明に入ってしまったが、私が整理したのは、「遊びとか学びの兄弟姉妹化」という言葉を使いましたが、同級生が下級生を教える機会がどの程度生きているのかということに関心を持ったわけです。

2番目の「授業のエデュテイメント化」というのは、エデュケーションとエンターテイメントを組み合わせるという意味で「エデュテイメント」という言葉を使いますが、このような授業がやれば、それは非常に良いのではないかと思ひたのです。

「学校授業の身体強化」というのは、よく言われることで、子どもたちはゲームで遊んで、身体を動かさないという意味で、身体をフルに動かさせて、そのプログラムを活用させることによって、心のプログラムを良いものにしたらいいのではないかと考えたわけです。

基本的な学力を強化する杉並区方式というのを作ったらどうだろうか。「杉並区はこのようなことをやっています」と言えるようなものを作ったらどうだろうかというのは、私の1つのアイデアだったのですが、「100点満点反復テスト法」というのは、10年ぐらい前に私が浜美枝さんと対談したことがあります。浜美枝さんは、「本当にうちの子どもたちはいい先生に出会っています」と言うのです。その先生は、クラス全員の子供が100点を取るまで同じ試験問題を出すというのです。つまり、最初は子どもたちに同じ試験問題を出すのですが、100点を取った子には次は少し難しい問題を出して、100点を取れなかった子にはもう1回同じ問題を出す。全員が100点を取

るまで何回でも同じ問題を続けて出すというのです。勉強があまり好きではない子どもは低い点数のテストは持って帰らないかもしれませんが、最後に100点を取った時には、「お母さん、100点取ったよ」と、とてもうれしそうに持って帰ってくるというのです。「そのようなことをやっている先生が教えてくださるので、助かります」という話を覚えていたのです。今日ここには校長先生もいらっしゃいますから、「そういうのは当たり前のことだ」という話があるかもしれませんが、それを何とか良い言葉で表現できないかと思ったので、「100点満点反復テスト法」というのを私が書いたのです。あとで校長先生からコメントをいただきたいと思います。

「朝礼読書」というのは、埼玉県の中学校の校長先生が、毎朝10分間全校生徒にそれぞれの教室で本を読ませる。それは自分の好きな本でも、家にある本でもいいし、本屋さんで買ってきた新しい本でもいい、10分間だけ静かに本を読むということ、毎朝繰り返す。そうすると、子どもたちが本を読むことが好きになるというのです。漫画だけではなく童話とか小説などを読むというのですが、数年前に始まった運動が、いま日本全国ですごい数に増えているのです。もしそのようなことをやるのなら、それも1つの方法ではないかと思ったわけです。

5番目の「メディア機器による教育の促進」というのは、いま文部省が盛んにやっているインターネットで、自分で情報を引き出して自分で勉強するという意味で、教育という先生が教えるということですが、メディアを使うのは子どもたちが自分で情報を引き出して自分の知識にしていくということですから、そういう意味で「学育」と呼んだらいいのではないかと思います。「学育」という言葉を使っている先生もおられるようですので、そういうのを促進したらいいのではないかと思います。私は当然杉並区もやっていると思っていたのですが、14%しか動いていないというのは非常に低いのではないかと思います。あとでほかの区に比べてどうなのかということも教えていただければと思います。

グループ形式で授業をやる。つまり従来のクラスルーム方式で先生が教壇に立ってというのではなく、それぞれのグループが一緒になって勉強するというのは、どこでもやっていると思います。最近は総合的な学習というか、生徒自体が自分の問題を見つけて勉強するような方式が導入されていますから、そういうものも当然入ってくると思います。

その次に「ジョージ・ルーカス方式」と書いたのは、私たちのチャイルド・リサーチ・ネットワークで去年11月に、エデュテイメントというか、遊びと学びを近付けるのにはど

うしたらいいかということで、小さな国際シンポジウムをやったのです。そのときにアメリカから2人、現在アメリカで仕事をしているスイスの方、それからインドの方が1人と外国の方を呼んで子どもたちが楽しく遊びながら学ぶということを実際にやらせて研究しようということで、小さな会をやったときに、ジョージ・ルーカス財団というのがあるということを知ったのです。

ジョージ・ルーカスという人は映画監督で有名な映画をたくさん作って、それで儲かったお金を教育財団にして、子どもたちの教育をやっています。どういふことに金を出すかという、ジョージ・ルーカスという人は、あのような映画の才能の豊かな人ですから、普通の子供とはちょっと違ったのだらうと思います。ですから、まともに学校をやらないわけです。どこの大学を受けても入れない。最後には映画の専修学校に入り、そこを卒業して映画界に入り、あのような大成功を収めたわけです。彼は「教育というのは、子どもの好きなことから始めたらどうか」と言うのです。

ある子どもが、「私は動物園に行きたい」と言うと、「子どもは動物園に行きなさい」と言い、動物園に先生が行って、そこで授業をする。もちろん動物のことも勉強するのですが、ほかの授業もやる。そういう授業方式をやる所にお金を出しているのです。私はそれは非常に面白いことだと思ひます。

特にクリエイティビティ（創造力）を育てる教育をしなければいけないと、いま多くの学者先生もおっしゃっていますし、21世紀の日本を創っていくためにも、そういうことは非常に重要だと思ひますが、そういう考え方の教育が、ある意味では非常に重要かもしれません。すべてが平均的に良いのではなく、何か飛び抜けて良いものを持っていれば、そこでその子どもに学びの場を作っていく。私はそういうやり方が非常に重要ではないかと思ひています。しかし、これも私のような素人の立場から考えるのであって、学校の先生の立場からは、いろいろなご意見があるのだらうと思ひます。

コンピュータで勉強するのも、子どもというのはいじっているうちに、どんどん自分で情報を出していきますから、やはりそれは好きな所から入っていき、知識を持ってきて、情報を集め、自分のものにするといった授業方式だらうと思ひますし、教えるよりも自分の力で学ぶ力を子どもたちにつけなければいけないのではないかと思ひます。

赤ちゃんを見ていると、まさに遊んでいることと学んでいることが一緒ですし、どんどん自分で覚えていきます。言葉だってお母さんにあやしてもらっているうちに自然にマスターしてしまいます。マスターしたものの文法を、高等学校で習う。私は60点ぐらいがやっと取れるぐらいしか文法を理解できませんでしたが、しかし言葉は使えるよ

うになります。テレビの扱いも子どもは自然に覚えていきます。大体2歳ぐらいになれば自分でスイッチを入れて、自分の見たい番組を出せるようになります。そういうところに本当に学ぶということのキーポイントがあるのではないかと思うので、こういうことを書いたわけです。そのことでいま教育委員会からご説明をいただきましたが、是非委員の先生方のご意見をいただければと思います。

委員 前回委員の方々から出たご意見を、授業、指導内容、形態といった点から、6つのジャンルに分類してまとめていただき、ありがとうございました。また先ほど教育委員会から各学校の重点とする活動、あるいは今一番力を入れている教育、内容面の貴重な資料をいただきましてありがとうございました。私は授業と指導内容にかかわって、もう少し学校授業の人間化ということを追求する立場から、お話を申し上げたいと思います。

「子どもたちが生きるよろこびいっぱいになる」ということは、ここでは学校という場を土台にして論議が展開されていますから、子どもたちが学校に通学するなかで、子どもたち一人ひとりが、学ぶよろこびいっぱいになるという状況にならなければと考えます。

そのためには、子どもたち一人ひとりの自ら学ぼうとする自発性というか、進んで取り組むという面が大事にされなければいけないし、また様々な子どもたちが生活していますから、その集団で、一人ひとりの多様性というか、持っているものの違いが大事にされなければいけません。また「指導の重点項目」として挙がっていますが、多くの友達とかかわって、相互の活動が促進されることも大事にされなければなりません。そして、この考え方を基にして、授業とか指導内容を再構築したり、新しい方向に進めたりする必要があるのではないかと思います。

具体的には、学ぶよろこびを持たせるような授業、カリキュラムのあり方、あるいはその組み方を、これからの学校は考えていくことです。

その1つは、基礎・基本を学ぶという点をしっかりと踏まえるということです。読む、書く、計算する学習とか、道徳を中心とする心の学習などは、学習の基礎・基本の部分に当たると思いますので、カリキュラムに従ってしっかり教え込まなければいけないということです。

もう1つの柱は、一人ひとりが持っている良さを伸ばしたり、学ぼうとする意欲に基づいて、自分で課題解決を追求したりすることを大事に進めることです。つまり、課題

別の学習、あるいは選択別の学習というか、自分で学習内容を多くの選択肢から選んでいく学習などといった面、言い換えれば個別の学習面をどう組み立て、バランスある学習をカリキュラム化する必要があると考えます。学ぶよろこびを持たせるための授業、そのカリキュラムのあり方は、今後考えていく必要がある学校の役割と思っています。

基礎・基本の学習をしっかりと捉えるとともに、個別の学習カリキュラムを充実することがこれからの学習教育で重視される側面です。例えば、理科とか社会、音楽、図画工作（美術）、体育、総合的な学習、クラブや部活動などの面は、個々の学ぶ力、学ぼうとする意欲にも相当違いがあるし、個々の子どもによって差異がありますので、それを生かした学習を、いかに組み合わせていくかということが、学校の1日の学習活動、1日の学校生活の中で、もっともっと大事にされなければいけないのではないかと考えています。

そして、子どもの学習活動は1日の流れの中でもある程度リズムを持たせたり、1週間の流れの中でもリズムを持たせることです。例えば、午前中は静かな雰囲気の中で基礎・基本の学習を徹底してやる。また、心の学習を徹底して勉強する。そして午後になれば課題別の学習、あるいは選択別の学習を中心に自分の学ぶ学習課題に取り組み、追求するといった活動に向けさせる。午後の主体的に課題を追求するところでは、個々の学習カリキュラムが優先されますので、場合によっては異年齢での活動や、学習グループが出来上がって、そこで活動するといったこともあり得るわけです。そういうことを踏まえながら1日の流れを組んでいく。それが1週間の流れになれば、例えば、月曜日、火曜日、水曜日辺りまでは基礎・基本となるような学習のカリキュラムを組んでみる。そして、木曜日、金曜日、土曜日と週末になったら、課題別中心、あるいは選択別中心の学習の内容を組んでみるといった1週間の生活の流れに即した学習のあり方を展開する。このような個々の自発性、あるいは自主性に基づく学習意欲を大事にしたカリキュラムの組み方を、「杉並方式」として開発する方向で模索していくことも、子どもの学ぶ主体というか、意欲を持った学びが少しずつ子どもたちの中に形成されていくことになり、学ぶよろこびいっぱい状況が出来上がっていくのではないかと。学校へ行くことが、張合いが持てる毎日となり、そして学校へ行くことによって、その学校に誇りを持てるという、学ぶ喜びに繋がっていくのではないかとと思うのです。

したがって、授業カリキュラムを支える教師の指導体制としては、ホームルーム・ティーチャーというか、学級を中心として指導していただく先生がいらっしゃるということと、各教科の専科ティーチャーというか、専門教科を教えてください、

それから、この前にも出ているように、地域人材という面のゲストティーチャーの組み合わせが可能となることにより、子どもたちの興味、関心、知的な好奇心、自ら学ぼうとする力などを引き出し、喜びを持たせていくといった協力的な指導組織を、創り上げることも大事なことではないかと思います。

会長 どうもありがとうございました。どなたかほかにございますか。

委員 いま委員がおっしゃったことは、少しずつですが、杉並区の公立の教育の中で進め始めていることというか、だいぶそういう方向性が見えてきたのではないかというのがあります。まず、現場の子どもたちを見ていて、先生が足りないという気がします。TT方式といっても、専科だけとか。杉並方式という教育がどのようになっていくかはこれからなのかもしれませんが、分かる分からないという段階の中でも、ちゃんとケアしてくれるようなTT方式がとれれば、もう少し具体的に子どもたちが授業に身が入るのではないかと思います。

会長 私はTT方式というのは分からないのですが。

委員 先生2人で。少人数制とかいろいろありますが。

会長 テューターティーチングですか。

委員 チームティーチング方式ではないかと思います。

会長 2人の先生で1クラスをやると。

委員 確かにいま委員がおっしゃったように制度面でも出てきますが、少人数クラスとか、TT方式の導入ということになると思います。前回は授業が分かることの大切さというのは、一応全員の共通の認識ということで、前回確かめられたらと思うのですが、1学級の人数というのはとても大きな問題だと思います。実際にいま、杉並区の小学校の学級が44校で560近くあるわけですが、そのうちの100クラスが35人以上の人数です。ですから、いちばん多く考えると、4,000人近い子どもが、非常に多い3

5人以上のクラスで勉強をしているのが現状です。その中では現場の先生自ら、全員に分かるように教えることは無理ですし、全員が授業の内容がすべて分かっていることを確認するのさえ難しい、とおっしゃっています。

もう1つは、私立の学校でもあるのかかもしれませんが、教育課程とか指導要領など、国が定めたものがありますが、それは一律にこれだけの時間をこの授業に割くとか、これだけの内容を小学校では学ぶ、中学校では学ぶというものが定められていると思います。それを消化しなければいけないというのは、現場でどのぐらいのプレッシャーというか、強制力を持っているのかということが、公立に子どもが通っている親としては確認できないのです。もしもそれがあつために次から次へと子どもが十分理解しているかを確認できずに次の授業に進まなければならないのなら、それは根本の大きな所から見直す必要があると思います。それをした上で杉並方式と言われるような、子どもが本当に分かりやすい授業を開発できるなら、それは素晴らしいことだと思っています。

杉並には済美教育研究所という立派な伝統のある研究機関がありますので、いま地方分権とかいろいろなことが言われていて、国からも都からも、区のほうに権限がいろいろな委譲されていると思います。ですから、教科書の選択から、もっとほかにもいろいろな分野で杉並が独自に、もっと大きいものにとらわれずに杉並区が考え出して、学校の中で活かしていくものを、どんどんこれから積極的に研究して、本当に杉並方式と言われる授業が展開されるならば、それはそれで素晴らしいことだと思ひ、是非力を入れていただきたいと思ひます。

そのときにメディア機器がとても大きい力を持つということは感じています。どうしても子どもの習熟する時間の差が出てきますから、そういうときにパソコンなりを使ったプログラムを使って勉強するやり方は、例えば、読み、書き、計算の辺りだと活用できるのかなという気がしています。

会長 臨教審のときに、クラスの人数を小さくするという話が、相当ホットなディスカッションだったのです。私などは「クラスの人数が少なければ少ないほどいいのではないか」と言うと、あのかのときの文部省の説明は、「あまり小さいと教育がやりにくいこともあるのだ」と言っていました。それは文部省の逃げ口上だったと思ひのですが、一体全体何人ぐらいなら、クラスがいちばんうまく動くのか。

委員 小学校のPTAの協議会でもいつも問題になるところですが、30人以上を教える

のは非常に難しいというのが現場の先生の実際の声だと思います。先進国の例などを見ると、20人というのは理想かなという所で、いつも私たちの意見は落ち着きます。

会長 あとはいかがですか、少クラス制。

委員 先ほど委員から公立学校での学習指導要領等々のお話があったかと思います。確かにこれまでは文部省、県、学校といった流れがあって、時代時代によって変わってきているわけです。2002年から行われる新しい学習指導においては、かなりの部分が学校の校長、教職員でカリキュラムを構成していくようにというか、自由度が増してきていることは事実です。

ただ公立学校という立場からは、どの子どもたちも受け入れ、何とか力を付けて中学校なり卒業させたいという思いです。特に、国語、算数の面では、どうしても最後まである程度の力を付け、教科書もほとんど終了させたい。また、途中で止まってしまうと、当然保護者からクレームがきます。これは何回も経験しています。社会とか理科とか総合的な学習については、学校でいくつかの選択をしていいという部分も出てきています。ですから、典型的な学習と発展的な学習というのも出てきています。特に総合的な学習は学校の独自性に任されているというのが実態で、私は今回の学習指導については、大変弾力的な大綱的なものだろうと思っております。

人数の点ですが、私の学校にも1クラス38人というのもありますし、1クラス40人の経験もありますが、少なければ少ないほど良いと単純に考えがちですが、端的に言えば、30人がいいのか35人がいいのかという、その辺のところではないかと思えます。30人を割っていってしまうと、15人と15人の平均化の男女のバランスですと、2チームが作れない。15対15という1チームしかできません。3チーム作ろうというときに、スポーツによってはできなかつたりする場合がありますので、私は何人がいいとは言いませんが、とりあえず、例えば35人を杉並区で何年か計画でやってみるとか。

もう1つは、TTをもっと入れていっていただくとか、独自性のある、特色ある人的支援というか、講師を杉並区独自でお願いして、入れ込んでいくこともできる時代だと思えますので、杉並区の顔が見えるような、これからの人的支援には、私も賛成です。

委員 私は個人的にはどんなに制度、方法が変わっても、人が人を教えるのです。教師が

いて子どもたちがいる、その中でよろこびがいっぱいになるためには、皆さん同じではないと思います。レベルという言葉を使っては申し訳ないのですが、それぞれ知識も違うし、能力も違う、体力差もあります。そういった子どもたちに喜びを分かち与えるためには何が必要かという、一人ひとりの子どもたちを見てあげて、一人ひとりの子どもの良さを認めてあげる、励ましてあげる。冒頭に会長が言いましたように、子どもの側に立った考え方、姿勢というのは、そういった所に基本があると思います。

そんな中で、確かに40人と30人とではどちらがいいかと言ったら、30人のほうがいいかもしれません。少なくとも私が現場を見ている中で、30人がベストなのか、40人がワーストなのかというのは決して言えないと思います。その教師の力量によって「40人でも大丈夫だよ」、「30人のほうがいいよ」という声は、どちらが多いかは分かりません。

前にも言いましたように、杉並区独自のものを作るのであれば、そういう優秀な教師をバンクしておくことです。そして、中学校、小学校の必要に応じて子どもたちの視点に立った教師を派遣する。俗にいう教師の資質向上です。そういった教師を我々が育て、杉並区が人材を求めるといっていい限り、不平不満はいっぱいあります。ですから、子どもたち一人ひとりが同じように満足はできません。その子にとって何が満足なのか。「今日は良かったな、先生に声をかけられて良かったな、1つ認められて良かったな」と、それが喜びにもなるし、生きる喜びになって、それから学ぶ意欲にも通じるのではないか。端的にいえば、人が人をどう見るか、どう教えるか、そういう観点に立ったときに、杉並独自のものがあるといいのかなと思います。

委員 子どもたちに学ぶよろこびといいますか、そういうものを与えるにはいろいろな方法があると思います。会長が出されたのは6項目ほどありますが、実践をしていく場合に、現場の教員の問題があると思います。それは現場の教員自身に心身ともにゆとりがないと良い教育ができない。教員自身も教える喜びが味わえるような物理的な条件や精神的な条件がないとなかなか良い教育ができないのではないかと、近ごろ特に思うようになりました。やはり教員自身が忙し過ぎるのです。忙しいので生徒に目が向けられないときもある。正直言って、私もそういう時がありました。

現場で言いますと、「教員には夏休みもあるし、春休みもあるし、いろいろな休みがあつていいな」とよく言われますが、現場はそうではありません。ちょっと挙げただけでも中学校で言いますと、教科の指導をしなければいけませんし、学級指導もしなければ

ばいけない。学級指導もだんだん難しくなってきます。これは生活指導の問題もあれば、進路の問題もあれば、不登校の子も出てきていますし、いろいろなことが増えています。

それから学校を運営していく中での役割、教務係、研修係などの公務分掌があります。それから、いちばん大きな学校行事というのがあります。常に学校は運動会をやったり学芸会をやったりいろいろな行事をやっていますが、それについて先生方はみんな委員会を組織して、それも担当しなければいけない。会議も結構多いです。その上に部活動があります。学習指導要領でどう位置付けられているかということ、非常に曖昧なところがありますが、部活動で何か起こると、すぐに責任だけは教員がとられるのです。しかし、学習指導要領の中で部活動をきちんと規定した文章は、いくら探しても出てきません。必修クラブを部活動で代替していいということは書いてありますが、では、部活動はどのように位置付けるのだと言っても、ないけれども、相当のエネルギーを部活動には費やすのです。

ほかにもたくさんあると思いますが、こういう仕事が教員自身にのしかかってきているわけです。そういう状況の中で本当に子どもたちに喜びを与えられる教育ができるかということ、ここの所を基本的に解決していかないと、どんな良いメソッドを作っても、それをなかなか実践に移せない。またゆとりを持って子どもたちに接することができないということは、子どもたちに喜びを与えられないということが出てくるのではないだろうか、と現場にいてすごく感じます。

前回私が言ったように役割を分担しなければいけないのではないかと。だからこそ、この会議があるのではないかと。学校だけでは解決できないたくさんの仕事を抱えている教員の仕事を、もっともっとみんなで分担する。例えば、家庭においては基本的な生活習慣については、少なくともすべて学校にお任せではなく、最低家庭でやるべきことは家庭できちんとやるということです。例えば、いまの部活などの問題についても、ある程度社会体育のほうに移行していく。教員も2002年から40時間労働制になります。いままでは教員以外は全部40時間労働制ですが、現在、教員だけは猶予期間で2002年までは40時間労働をしなくていいことになっているわけで、教育調整額何%かでその分を補っている形になっています。

そのような状況の中で、分担をすることの必要性はますます必要になってくるのではないだろうか。そういうところを担っていただく地域の方々が、では、どういう所をどのように担えるのかといったものをきちんと出していかなければいけないし、また行政側においても、いま問題になっているようなことについては、ただ単なる地方自治体の

問題ではなく、国自身の問題だと思えます。教育にお金をかけるというよりも、むしろ財政がないから切り捨てている。東京都で私学の場合でも、今年は5%の切り捨てがあり、教育だけが聖域ではないということでお金をカットされました。お金をカットされると、こういうご時世ですから月謝は上げられません。何をするかというと先生方のほうに無理を強いなければならないという現状が出てくるわけです。

ですから、少人数の学級編成の問題にしても、先生方の教科の持ち時間数を減らす問題にしても、各学校の教員の数を増やすにしても、そういうのは、どちらかというとお金の問題、行政の問題なのです。現場でどうジタバタしても、どうあがいてもできない問題です。まさにこれは他から力を借りなければできない問題なのです。

このように、いま現場の教員が非常にあえいでいる状態の所もありますので、それに父母、それから地域の皆さん、そして行政の方々が救いの手を出してくれる。そして教員と一緒にやっていけるような状況を作っていくといった姿勢がない限りは、新しい1つのことをやるにしても非常に難しいのではないかというのが現状だと思います。

会長 どうもありがとうございました。だんだんこれはどうにもならないという感じになってきましたね。

委員 実際には、そういうものをどうやって切り開いていくかということが、この会の1つの目的でもあるのではないかと思ったものですから。やり方はあると思うのです。委員がやっているようなことも、力を借りるということも、この間も言いましたし、行政面などについても、もう少し杉並の教育委員会の方々に予算等についても努力していただくとか、開かれた学校という意味でするならば、PTAの活動は、いま杉並は大変活発だと聞いていますが、それをさらにもう少し突っ込んで学校にいろいろなお手伝いに来ていただける方を増やすとか、部活動も一部を社会体育のほうに移していくとか、そういう具体策はあると私は思っています。

会長 ひと通りディスカッションして、今日は「学校授業の人間化」という限られた面ですが、第3回、4回とひと通りやっていって、また元に戻るようになるだろうと思えます。少なくとも誰にも分かる授業法の開発ということと、学校授業の人間化のための制度の捉え直しは表裏の関係です。少人数クラス制というのが出てきましたが、先生の補助員制度の導入、授業の地域の人材活用について、ご意見がございましょうか。先生の

補助員制度の導入というのは、教育委員会のほうで何かデータがありますか。それから授業の地域の人材活用ということですが、もう1回説明していただけますか。

指導室長 1の少人数制クラスの導入については、データはございません。

会長 いま平均何人ぐらいなのですか。区全体では小学校だと1クラス何人ぐらい、中学校で何人ぐらいですか。

指導室長 いまデータがありませんので、至急調べてご報告したいと思います。2番目の先生の補助員制度の導入というのは、どのような観点のことを指しているのか定かではありませんが、現在、補助員制度と見える形の中では、TT（チームティーチング）というシステムが東京都の教育の中にあります。それぞれ予算の関係で、東京都からの枠がありますので、杉並区の中でも全校に配置はしてありませんが、実際の数はあとで申し上げますとして、大体小学校が3分の2、中学校が3分の2という段階かと思っています。そのほか、補助員という形での制度は、いま教育委員会のほうでは持ってはおりません。

会長 例えば、フルに先生を雇って定員の中で増やしてくださるわけですか。

指導室長 はい、一応チームティーチングという場合は、定数の中に組み込んで入れるということです。

会長 多少先生が余ってきているから、そういうことができるということでしょうね。

指導室長 はい。それから先の授業に地域の人材活用という部分のご質問でしたが、先ほども申し上げましたように、小学校においてもそれぞれの各教科、道徳、総合的な学習の時間の項目等を見ていただきますと、地域の方のお力、または連携しながら授業を構成していこうというパーセンテージが見える部分があるかと思っています。その中で、（2）の道徳の部分の「カ」辺りは家庭・地域・社会との連携ということで、この辺がそれぞれの活用の裏があるのかなと。特に総合的な学習の時間については、いろいろな教育活動が想定されますので、「オ」の「地域の環境や人材の活用」と、かなりの学校

がそこに期待しているという部分が見えるような感じがいたします。

また中学校においても、いろいろな形の中で、資料の3枚目の「道徳」の部分についても、後半では公開授業等もやっていたりしますが、保護者、地域の協力といった部分では、人材を活用しながら、授業の中で活性化を図る。また総合的な学習の時間でも、地域の人材活用というのは、かなりの学校でこれから期待しながら、教育プログラムを組んでいこうというのが見えるような感じがいたします。

会長 こういう制度でTTが導入される前と後では、やはりうんと違っているのですね。

委員 以前は、中学校ですが、小学校はコーレムティーチャーということで、先ほど委員がお話しましたが、大体1人の先生が教える機会が多い。中学校の場合は、それぞれ教科で分かれていますので、その中で専科だけではなく、主要5教科の中にもTTを取り入れている学校もあります。

私はこの会にずっと出ていて、公立学校の校長としては、いちばん押さえておかなければいけないのは、自分勝手にできないということです。この教育がいい、この教え方がいい、こういう方法がいいと自分で思ってみても、条理で動いていますので、大前提が条理で仕事を進めなければいけないということを先生方にも委員の皆さんにも分かってほしいのですが、その中からより良いものを見つけて導入していく。その1つがTTです。

それから指導室長のお話の中に何回もありましたが、地域の人材を活かす。かつてはそのような学校がほとんどありませんでした。いまこのような学校が年々多くなってきています。それから生徒の教え方についても画一性やいろいろな部分がありましたが、一人ひとりの教師は本当に工夫しています。目に見えない部分で大変申し訳ない言い方をしていますが、学校の授業も公開している学校がいっぱい増えてきています。授業だけではなく、いろいろな部分で地域や保護者の皆様に学校を公開して学校に来ていただく。それから我々も地域に人材を求めて足を運ぶ。その他教師も外へ出て学ぶことが多くなってきています。これも事実です。数はどのぐらいかと言われると、全部が全部やっているわけではありませんが、子どもたちのために何ができるか。委員がおっしゃっていましたが、「大変だ、きつい」と言っていたら、何もできないのです。私は一教員の時期があったときに、でも生徒の喜びと教員の喜びもあるわけです。どんなに悪

条件の中でつらい立場に立っても、嫌な思いをしても、自分と子どもが何かをやって達成したときの喜びは教師にも喜びがあるわけです。ですから、子どもたちの「よろこびいっぱい」というのは、その裏を返せば教師の喜びでもあるのです。ですから、同じ条件の中で工夫していかなければいけないというのが、いまの時代ですから、そこで良い部分とか楽な部分とか、お金がいっぱいもらえるなどというのは、条令で決まっているのですから、全くないわけです。その中で私たちは教員や生徒が喜びを得られるように日々努力しているつもりですが、なかなか形に出てこなくて苦慮しています。

会長 授業に地域の人材を活用した事例でこういうのというのはありますか。

委員 総合的学習をいま各学校で取り組みを重点化していますので、その中で語らせていただきます。例えば、国際理解という問題がありますと、この区にも和泉に、国際的な私的な機関があって、そこから留学生というか研修生に来ていただいて、コーヒーとか向こうの農園の話などをしていただくなど、当然ながら国際文化交流協会とか地域におられる留学生、外国の方などに来ていただいて、子どもたちが大変目を輝かせて授業を組んだことがあります。

それからいま呼び掛けているのは、保護者の中で素晴らしい専門性を持った方が多々おられる。そういうところの素晴らしさを何とか発掘させていただいて、お力を借りたいという各学校の願いを持っています。

先立っても申したかもしれませんが、区の行政としての支援を、例えば、1校だけで求めるとなかなか難しい壁がありますので、こういう分野ではこういう素晴らしい方が区内におりますよという、是非そういう素晴らしいリストを作っていただきたいというのが1つです。

昨年度小学校で英語の講師として、教育委員会から「もしも手を挙げる学校があったら手を挙げてほしい」ということで、本校を含めて3校が手を挙げました。中学校では英語のたんのうな外国の方がたぶん来ておられると思いますが、小学校でやったところ、私の学校だけですが、わずか2カ月のうちに4回の授業があり、私も何回か見せてもらいました。

日本の先生とは違ったパフォーマンスがありますし、教材もいろいろ工夫しており、日本語も適当に喋るという方で、最初に「おい、受けようじゃないか」と言ったら、教師は「嫌だわ」というのが正直な本音でした。終わってみたら先生も一緒に楽しめて、

大学出の教師ですから、ある程度の会話ができますので、その教師が外国の先生の補助者になって、分からない子どもの所に語りかけたり、「こうするのよ」というようなことをやっていました。私はこの制度は年間を通してどうこうということもありませんが、是非小学校から中学校へ行くときの橋渡しとして3学期間何時間かでもいいですから、一律ではなく、「やりたい学校はどうぞ」という形で手を挙げてもいいのではないかと。特色のある学校ですから、一律ではなくても結構だと思います。大したお金もかからないのではないかと思いますので、是非中学校の橋渡しとして卒業期に当たって何か思い出に残るプレゼントもしていただくと有難いという実践をいたしました。

指導室長 先ほどの質問に答えてもよろしいでしょうか。

会長 はい。

指導室長 杉並区の小学校の1クラスの平均ですが、30.6人で、中学校が33.8人です。

またこれは資料ですが、教職員定数について改善を図り、教職員1人当たりの児童生徒数を欧米並みの標準という比較をした平成11年度版の『教育指標の国際比較』という出典がありますが、これはあくまでも教員全体で児童数を割りますので、1クラスということではなく、誤解しないでいただきたいと思いますが、小学校、初等学校においてはアメリカが18.8人、中学校が14.6人。イギリスは初等学校が23.1人、中等学校が16.4人です。フランスは初等学校が19.6人、中等学校が12.9人。ドイツは初等学校が18.7人、中等学校が15.0人。日本は初等学校が19.3人、中等学校が16.7人で、以上のようなデータがあります。

会長 そうすると、あまり遜色がない。つまり、小学校の子どもの数を先生の数で割った数ですから、校長先生から全部入って割るわけですね。

指導室長 この数は、その学校に勤務している教職員と出ていますので、それで生徒数を全体で割ったわけです。もし15名の教職員がいたら、それに対して生徒が200という数があったら、それで割るというデータで、1クラスということではありません。

委員 いまのデータはともかくとして、杉並区の実際の小学校の人数の話ですが、例えば、具体的に挙げますと、平成12年4月に若杉小学校では6年生は21人ずつが2クラスです。高井戸第四では5年生が1クラスで40人です。先ほどから少人数の話をしていきますが、少人数クラス制は導入されてはいないわけで、行き当たりばったりでこういうことが起きるということになります。

会長 人の数は減ったわけですね。

委員 そうです。あと41人というクラスの定数がありますので、41人を1人でも超えると2クラスになるのです。ただ、41人ですと、例えば、3年生のときに42人だと20人程度のクラスでしたが、たまたま1人転校してしまうと、5年生で41人ということがあり得るわけです。ですから、クラスの人数編成に関しては、いま一番正しい言葉は、行き当たりばったりというか、そのとき、その年に応じて少人数がたまたま導入されているということです。

会長 減ってきているから仕方がないですね。

委員 そのときに、例えば、算数でも国語でもその前のクラスは20人で教えられていた子どもたちが、次の年には40人で教えられるという事態が発生しているわけです。それは制度の持っているとても複雑なところだと思っています。

会長 そうですね、もう少し柔軟に対応できるようになればいいのですが、これも文部省のいろいろな制約があるのでしょうか。

委員 失礼ですが、皆さんの話を聞いていて大変退屈です。1学級の人数が何人であろうが、先生が何人いようが、それが原因で子どもたちが本当に活力が無くなっているのでしょうか。

我々委員が集まっている懇談会の目的は何ですか。子どもたちを育成することであって、学校の教育制度や内容を懇談することではないのではありませんか。私は初め出たときによく分からないので、前回の2回目のときに、「学校で子どもたちが生きるよこびいっぱいになるには」というテーマ自身がおかしいのであって、学校を取ってくれ

という話をしたのです。子どもたちが元気いっぱいになるには、学校だけでは非常に難しいのです。特に会場の皆さんにも委員の皆さんにも聞きます。皆さんは社会人として活気があるのですか。子どもたちをどう育成しているのですか。そのことを棚に上げて学校の中だけの制度とか内容だけを話し合っても始まらないのではないのでしょうか。

私は学校教育の専門家ではありません。しかし、日本の社会の後継者を育成する青少年教育の専門家ではあります。その立場から考えて、いま学校教育というのは行き詰まっているわけですから、学校の中だけでは青少年の健全育成は難しいし、できません。明治5年に小学校、中学校が学校教育制度として導入されてから、学校の中だけでは教育はできていないのです。本来は家庭や地域社会が半分以上を占めていたわけです。いまそのことを忘れているのです。だから、このテーマの「学校で」というのはおかしくて、生きるよろこびをいっぱいにする子どもたちはどう育成すればいいか、杉並区全体を含めて、日本の社会全体も含めて、そういう話合いをしなければいけないのではないかと思います。

実は私には5人子どもがいることを話しました。私の子どもは小学校から中学校、高校まで杉並区の学校です。まず運動会、学芸会が日曜日になされないことが多く、月曜日とか火曜日なのです。なぜ月曜日とか火曜日にするのだというと、運動会とか学芸会というのは学校の行事だからだと先生方は言うのです。しかし、日本の教育として、教育の目的がもし日本の社会の後継者を育成するため、杉並区という社会の後継者を育成するためなら、学校だけでは決して教育はできません。開放していただき、地域の大人も親も一緒に運動会ができ、学芸会ができればもっといいのではないのでしょうか。

先々週の日曜日、私が歩いていましたら運動会がありました。4時半ごろ終わって、たくさんお父さん、お母さんなど保護者が行っていました。終わったからあとの片付けを全部子どもたちにさせよう。行っている大人たちには何の呼び掛けもないのです。子どもは親を、大人を見習っているわけです。見習う親や大人が無くなったら子どもは成長しません。知識、技能は自分でも習得して向上できますが、人間性、社会性は見本がなければいけません。

例えば、小さい時に「この色は赤だよ、黒だよ、白だよ」と教えらなければ日本で育った子どもたちが赤を黒と言い、白を黒ということはありえることなのです。我々の日常の感覚で黒と赤と白と区別する先人たちが作った価値観があるわけです。それを伝えていかなければいけないし、生活の仕方は見覚えていかなければいけない。その機会と場を作っていない。運動会などは親も一緒に後始末をすれば、非常にいいことなのです。

運動会もたくさんの人が行って見ればいい。見ると子どもたちは親や地域の大人に見られているから一生懸命がんばろうという気持ちにもなるでしょう。学芸会もそうです。そういう形で学校が非常に閉鎖的になっているわけです。これを開放しない限り、子どもたちを元気づけられません。

そして地域の人材を、地域に専門家がいると言うのですが、これは教えるための専門家ではないです。大人は全部専門家のはずです。先生も含めて、ここにいる皆さんもそうではありませんか。子どもにとっては、大人はみんな専門家なのです。子どもはなぜ学んでいるかといったら、大人になるためです。大人になるために学んでいるわけですから、体験しているわけですから、その辺にいる大人はみんな見本です。その見本の大人が何をしているか、何を言っているか、それによって子どもは学んでいくのではないのでしょうか。学校だけでそういう社会常識、社会性、人間性などは決して伝えられません。これは言葉や活字では伝えられないのです。だから、もう少し学校が開放され、教員も40人だったら教えられないとか、30人だったら教えられるなどということではありません。実際に私はいま60歳です。私が小さいときには40人学級も50人学級もありました。それで子どもたちにも教員にも元気がありましたか。子どもたちにも先生にも元気はありました。ですから、人数の問題ではないでしょう。制度の問題でもないでしょう。我々日本人の問題ではありませんか。そういうことも分からずに、いかに制度をとくか、内容の話合いをしても元気のいい子どもたちは生まれてきません。もう少し現実の人間として生きるのに必要なこと。大人が、親が伝えなければいけないことは何なのか、伝えてやっていただきたいと思います。

これは学校ではありませんが。私たちは毎年5月に「家族野外生活体験」というのを3世代でやってきています。この前も5歳から70歳までの、子どもから親、祖父母まで160人が集まってきてやりました。集まってきた親が何を言うかといったら、「今日は5月の連休だから、子どもたちをこういう野外生活体験に連れてくると、子どもが料理をしたりして、親が見て遊べるのだよ」というのです。「知らない子どもになぜさせるのだ、まず親がしなさい。親が楽しんでしていれば、必ず子どもは見習ってやりませぬ。親ができないことを子どもにしろと言って、親が見て楽しんでいるようでは親の資格がない。教育ということではない」と私が叱ったのです。そうしたら親がびっくりしてしまって「ああ、そうですね」と言って、やったのです。子どもたちを遊ばせたのです。子どもたちは2時間ぐらい遊びほうけました。ところが、疲れると帰ってきて、ジーンと親のそばに寄ってきます。親がやっている的一生懸命やるようになります。親

が嫌がっていたら子どもはしません。

そういう形で3日間一緒に生活をして親が何と言ったかという、「子どもがこんなに積極的にこういう活動をするものとは思っていなかった、やらせてもいつも嫌々やっていた」。やらせるから嫌々しているのです。親がやって親の物真似をさせるのだったら子どもは喜んでやります。

先生もそうだと思います。先生が子どもに対して「自分を見習え」と言えるのかどうか。そして親が子どもに対して「自分を見習え」と言えるのかどうか。これを持たずに子どもたちに「しっかりした社会人になりなさい。元気でやりなさい、しっかり勉強しなさい」と言っても始まらないことではないでしょうか。これは杉並区だけではありません。いま全日本が考えなければいけない問題です。日本はその穴に大きく落ちてしまっているのです。そして制度や改革や教員の資質、30人学級とか40人学級などという人数ばかり気にしてしまっているのではないのでしょうか。私はそう思います。

いま皆さんの話を聞いていて、これでは発展しないなと、私がここへ来て話す価値もないのかなと思いました。私は学校教育の専門家ではないから、学校の教育などはあまり知りません。しかし、いまの学校教育制度の内容はおかしいです。いまの皆さんの話を聞いていても主体が抜けていて、手段ばかり話されている。主体は何ですか。子どもたちを育成することでしょう。それがなかったら教育などはやめなさい。私が都合が悪ければ、私はこの会を脱退します、面白くない。

委員 表現は違うのですが、委員と私はある部分では一致しているのかなと思います。子どもたちを育てるのは、委員が言われるように、家庭であり地域であり学校であるというのは私も認めます。学校だけではできないし、家庭だけでもできない、地域だけでもできない。この点に関しては全く同意見です。

学校が閉鎖的であるというお言葉ですが、先ほど私が言ったように、学校はかつて閉鎖的だったものが、いまはすごく開かれています。もう少し現状を見ていただきたいのです。私は小学校ではありませんから分かりませんが、いま委員と話をしたら、小学校は行事を日曜日や祭日にやっています。中学校でも第2、第4の土曜日、日曜日、祝日等々で努力している学校もいっぱいあり、決してゼロではありません。そういった中で、父親が我が子を見る機会を多く持ってほしいと、私個人は言い続けてきています。それが現実的には少ないかもしれませんが、少なくとも母親だけが学校に来ているという現状ではありません。このような学校が年々少しずつ増えています。私は立場としては校

長会長ということで、「日曜日にもっとやろうよ」と言っています。なぜ日曜日にやったほうがいいかというと、父親に子どもの姿を見せるのです。普段は父親と子どもというのは、なかなか接点がありませんから、何かを言うときにポツと出てくると、急に父親が言って、そこで切れてしまう。交流がありませんので、そういった意味ではそういう行事の中で父親の参加を大事にしている学校が増えているのが現状です。

委員 私も小学校、中学校、子どもをずっと杉並に入れていますが、学芸会も音楽会も運動会も全部日曜日で、発表物は土・日のどちらでも好きなときにいらしてくださいということで、家族全員で行くという学校だったのです。杉並はいま、だんだんそういう流れになっていっているのではないかと考えています。

家庭と地域が子どもを育てることになるというのは本当にそのとおりだと思います。前回の最後に私は申し上げたのですが、杉並の中でも、ちゃんとまだ機能していないのかもしれないが、子どもたちが自ら取り組むような「子ども促進事業」とか、これからいろいろ取り組んでいこうとしていることはたくさんあります。活気がない、全然面白くないということではなく、今日たまたまテーマになっているのは、学校はどうやったら分かる授業をしてくれて、どのようにしたらもっと子どもたちが学校に楽しく行けるのかということに絞ってのお話なのだと、私は皆さんのご意見を伺っていたのですが、違うのでしょうか。

会長 そうです。次回は「学校制度の人間化」ということで、学校の開放、地域とのリンクという話をしたいと思います。

委員 委員が言われた件ですが、確かに大人として、また教員として自分の主体性を持って、1つの信念を持って子どもに接していく。その姿を見て子どもがそれに感化されて成長していくのだという側面はあると思います。

それでは教育的な条件はこちらへ置いておいていいのかとなると、そうもいきません。やはり両面なければいけないのではないかと考えています。我々が子どもに接するときに、子どもに何を求めていくか、また子どもから何を吸収していくかという面もあるのです。そういう中で、そういう面と、そういう子どもを育てていくためには、どういう条件、どういう環境を整えてあげなければいけないのかという側面と、これは二者択一の問題ではなく、両方の面があるのではないかと考えていかないと、ただ信念

だけで物事をやっていくといっても、なかなかそうはいかない面があります。

私も実は、若いころは65人の学級を持っていましたが、平気で数学の授業を教えていました。クラブの顧問をやりながら、出来ない子どもには残して補習もやっていました。いまから考えればよくできたなと思います。若さがあったし、何とかやろうという情熱があったからできたのだと思います。

しかし、学校という組織体の中で、それで全部やっていけるかという、そういう側面だけではない。教育条件を整備しながら、併せて先生方たちの情熱、子どもに対する愛情などが相まって1つのものが完成していくのではないかと、子どもが成長していくのではないかと、だんだん思うようになりました。ですから、委員が言われた、学校だけが教育をやるのではないということは、私も前々からそのとおりで、どうか皆さんの手を借りながら学校をやっていかなければいけない。もうそういう時期にきていますよと思っていました。先生は明治の昔からそうなのだと言われていましたが、特に現場ではそういうことを痛感しながら、今日話を聞いていますと、杉並の中ではいろいろな工夫がなされてきて、いろいろな方の手を借りながらやっている。しかも前に比べていろいろな面も開放されてきているということが発表されましたので、それならそれをもう少し進化していくことによって、子どもたちの成長を助けられるのではないかと、という発想に立ったほうがいいのではないかと思います。

委員 委員がおっしゃられたことはごもっともですし、そのとおりです。私は端的に言いましたが。まず杉並の小・中学校が全部土・日にやっているというのは嘘です。私の子どもは井荻中学校に行っていますが、井荻中学校のこの前の運動会は月曜日にやりました。

学校に大人が行っても見るだけではなく、参加させなければいけない。教育委員会もそうですが、先生方をお願いしたいのは、小・中学校というのは地域社会に附属しているものはずです。それがあまりにも独立しているのです。独立しているから親が行っても手伝わそうともしない、子どもと一緒にさせようとしない。例えば、我々が弁当を持っていても一緒に食べさせようとしない。子どもを学校の中にすぐ追い込んでしまう。一緒に食べていいと思います。親が来たら、大人がいたら、そこを一緒に使えばいいのです。一緒に行動することによって子どもたちが成長すると思います。それは方法だけではないと思います。

会長 委員、そういうディスカッションは、次の次ぐらいから何回も出てくると思います。

いまは学校の授業という立場で話をしているものですから、また次回の中でも学校と家庭と地域社会の連携という話も出てきます。学校の施設の問題もありますし、子どもを育てるとか、いろいろな地域的なことも出てきますので、今日はとりあえず学校の授業を中心にディスカッションを深めたいと思います。

委員 授業もいいですけども、何のための授業ですか。授業のための話合いですか、それなら教育委員会でやればいいではありませんか。いろいろな分野の人を集めて、こういう会合をしなくてもいいのではありませんか。私は学校教育の授業のことにはあまり関心がないですから。それだったら、私はその時間は参加しないでいいです。

会長 でも先生の貴重なご意見は次にもその次にも出てまいりますから。

委員 それは教育委員会というものがあるわけですから、明治5年からずっと学校教育の人たちが話し合っているわけですよ。どうぞそれはそちらでやってください。

会長 ほかにご意見ございますか。

委員 教育をどう考えるかということですが、教育学の基本として教育というのは、社会を通して自然に学ぶような「無意図的な教育」もあれば、そういう社会活動の中で、政治とか宗教というのは教育的影響も大きいというので、「反意図的教育」と言われていますし、計画的にきちんと教えるべきことを教えなければいけないということでは「意図的教育」があって、その典型が学校ですから、学校でどういう教育を行っていくかというのは、教育全体を考えた中でも基本的な所を担っていると思います。ですから、社会的な自然に大人のやっていることを見て学ぶなどということも重要だということは委員の皆さんは承知されていることで、でも計画性を持って推し進める教育を学校では、もっと改善すべき点はしていこうということで、いま話し合っているのだと思います。

最初のころに話が出ていたクラス編成や先生の補助員制について発言したかったのですが、なかなか回ってきませんでしたので話をさせていただきます。

まずクラス編成ですが、基礎的学習を行うには少人数が良いだろうということで、その点では20～30人ぐらいの線が出ていますが、それには賛成です。ただ、これは意

外な反応だったのですが、大学生のクラスで、教職課程の学生たちに、「いまこういう話合いをしているのだが、どう思うか」と授業のときに聞いてみたら、必ずしも少人数がいいという意見だけではありませんでした。これはどうしてかということ、それこそ学校の楽しさを何に期待しているかということ、「いろいろな人と友達になりたい。あまり少人数だと知り合える人も限られてきてしまう」というのが、わりと新鮮な意見だったのです。

そういう意見なども踏まえて考えますと、基礎的な学習をするときには、かなり少人数でやるが、それを決して固定しないというのはいかがでしょうか。例えば、スポーツなどでチームを作って試合をしたりするのが楽しいという、学校の中でいろいろなアクティビティがあります。そういう場面場面に応じて編成を変えていくような、固定してしまわないでフレキシブルなクラス編成ができるようなカリキュラムは考えられないのだろうかと思います。

もう1つ、先生の補助員制度についてですが、1つご紹介したいのは、私は千葉県に住んでいますが、柏市の実践です。柏市では教員免許を取得して、例えば、採用試験を受けたが、採用に至らなかったという人たちを登録させておいて、免許は持っているが、まだ先生の卵というか、本採用に至っていない人たちを、各校に1人ずつぐらい派遣しています。これは昨年試みとして1年間されたのですが、子どもたちにとっては先生とはちょっとひと味違って、若くて一緒に遊んでもらったり、クラブ活動をしたりすると、お兄さん、お姉さんということで非常に親しみが湧いて楽しい。あるいは授業のときには本当の専任の先生の補助をして机間巡視をしたりしてもらえる。若い人たちにとってもすごくメリットがあって、教員志望の人たちですので、実際に採用になる前に現場に入って、いろいろな体験と一緒にできるわけです。そういう中で、自分はやはり教員としてやっていきたいという動機付けにもなっているようで、この制度が相方にとって非常に好評なので、柏市では今年度もまた引き続きその制度を続けていくということ、地元の新聞で見ましたが、そのようなものも参考になるのではないかと思います。

会長 逆はないのですか、例えば、定年でお辞めになった先生を使うとか。

委員 そういうのはもちろん考えられています。私自身もいまの話合いを聞いていて、つくづく思ったのですが、もし失礼であれば謝りますが、肩書を持っておられるようなベテランの先生方は復古というか、自分たちの過ごされた子ども時代が非常に懐かしくて、

それがいちばん良かったという思いが、立派な人であればあるほど自分の歩んできた人生は良かったという思いがすごくおありになるのではないかと思います。そういう方はイレギュラーな形でときどき来ていただいて、いろいろなイベントなどでお話していただくという意味では、「昔はそうだったのか」ということで歴史的にも意義があると思いますが、子どもも時代とともに変わりますし、そういう感覚を無視することはできないと思います。

人間一般として普遍妥当的に大事なものを伝えていきたいというのは、もちろんありますが、その時代時代の子もたちがどうしているかを理解してあげる必要があると思います。だから、両方の協力が得られればいいと思いますが、柏市のような若手をあえて採用しているというのも、1つの良い例ではないかと思います。

会長 たしか文部省には日本の人材というか、この先生にはこういう講演をお願いすると便利ですよというリストがありますが、杉並区はそういうのはないのですか。例えば、杉並区に在住の方で地域の人材としてお願いできるような方のリストとか情報をまとめたものはないのですか。

社会教育スポーツ課長 社会教育の関係でそのようなリストはございます。

指導室長 指導室のほうにも、地域の方でこういう国際経験を持っている組織があるので、何かの場合に活用してほしいというようなデータをくださっているケースもございます。

会長 地域の人材を活用するということであれば、そういう人の、例えば、小学校の子どもたちの授業に行ってもいいとか、中学校に行ってもいいというのを整理してファイルしておくというのは、予算が多少かかるとは思いますけど、そんなに大きなお金ではないと思いますので、是非やって、そういうことが利用できるようにしたらどうだろうかと思っています。

いまあった、折角教員免許を取っても就職のできなかった方々を利用するというのは、私は非常にいいアイデアだと思います。確かにおじいさんやおばあさんを頼むよりはるかに良いだろうと思いますので、もし杉並区でそれを考えられるのなら。もちろん多少の謝金は出さなければいけないと思いますので、予算が付きますね。

委員 それもやはり昔からの方よりも若い人のほうが、安くつくのではないのでしょうか。

会長 それも考えていい方法ではないかなと思います。どなたかほかにご意見はありませんか。

委員 いまの補助員制の導入にしても、少人数クラス制というのは、いろいろなお考えがまたあって、ごもつともだと思うお話ばかりだったのですが、私たちも毎年々々申し出をお願いしていますが、結局実現しないのがお金の問題なのです。毎年言われていることが実現しないというのが実態なので、例えば、このように新しい、みんなで考える機会を作ってください、ある程度ここで答申を出しますね。それが是非実現に結び付くというところを強調していただきたいのです。良い制度はこれからもどんどんいろいろな所で、この中で提案はどんどん出てくるのですが、いつもお金がないからということなのです。

TTにしても、私の学校でも毎年お願いしているのですが、ずっと断られています。教頭先生、校長先生一同で、TTの先生を1人いただきたいと毎年お願いしています。でも結局実現しません。そこを是非お願いしたいということをお願いしておきます。

会長 懇談会ですから、どれだけ行政に制約を付けることができるかというのは、なかなか難しいと思いますが、意見を出すことは構わないのではないかと思います。委員がおっしゃったようなコンバーティブルというか、変えられるような、流動的にうまく動かすというのは、私は非常に良いアイデアだと思う。それが杉並区では手際よくやれるということになれば、それこそ杉並方式の1つにはなり得るのではないかと思います。具体的には難しいのでしょうか。先生の数は多くなりますか。

委員 多くなりますが、それこそ、そのようなTTがある程度実現しているようでしたら可能だと思います。実践例も結構あります。

会長 例えば、補助員というのか人材活用の人材というのか、そういう方々もうまく組み合わせることができればやり方があるような気がしますが、これもなかなか難しいのでしょうか。学校の先生方はどうでしょうか。

委員 自助努力というのか、いま工夫していることの1つに、例えば、40数名の2クラスになるわけです。体育を広い校庭を40数人で使っているわけです。これもいいのですが、例えば、2クラスで授業してみる。正規の先生が2人いる中での40数名なり50名とか60名をやるわけで、これも1つのTTだろうと私は思うのです。

まだ実現はしていませんが、小学校でも教科担任制があってもいいのだろうと思います。中学校ではいろいろな先生に見てもらうから、A君についてはいろんな見方ができるし、こういう所ではこういう子どもの活躍があったよという場面が出てくるわけです。小学校では音楽と図工程度で、家庭科もクラスによっては付く場合もあるわけですが、何ともまだ実現していないのが教科担任制なのです。それで行けば、たぶんうまくいくと思うのですが、それだけの人間が集まらないということと、高学年を持てる先生と持てない先生がいます。

それから平均年齢が小学校においても40数歳です。40歳ぐらいたったら若い学校というように言われています。数は把握していませんが。先ほどの委員のお話の若い先生が一時でも来てくれると、何か活性化できるのかなという面があり、先生と「昨日のテレビは面白かったな」という場面も出てくるのかもしれないと、いまは考えているところです。

会長 委員、何かご意見ございませんでしょうか。

委員 実は私は前回欠席しまして、今日はいろいろ戸惑っているわけです。1つは、前回のお話で、生きる楽しさをいっぱいになるような学校をどうしたら実現できるかということが話題になったということについては、ご連絡を受けました。前はかなり多方面に話が拡散したので、今日はもう少しまとめて話そうということで前は終わったと伺っております。

私も最初のときには、これはコミュニケーションの不足だったのかもしれませんが、私自身、先ほど委員が言われたような観点から教育を考えるという懇談会であるのかと思ってまいりました。ところが、例えば傍聴しておられる方のご意見をあとで伺ったり、マスコミなどで報道されたことでは、焦点がそこにはないかのような印象を受けました。というのは、私がこの委員を引き受けた状況的な文脈というものが、実は皆さんが期待しておられるような文脈とは違っていただけかなというわけで、今日は徹頭徹尾皆様のお話を承る立場で、それを伺った上で、また次回から考えがあれば述べさせていただこう

と考えておりました。

しかし、一応前回の申合せというか、学校の中でその子どもが生きる楽しみを、よろこびを味わうようにするにはということ、それがテーマであるということですから、その点については、私が常々考えていることは、今日の皆様のお話の中にほとんど出尽くしておりますので、2つだけに的を絞って申し上げます。

1つは、生徒、子ども、あるいは大人もみんなそうですが、クローンでない限りはみんな個人個人特色があり、個性がありますので、その個性差を活かした指導をするためにはどうしたらいいか。これはまず1つには、教師の態度があると思います。それから先ほどからお話に出ている無限に数が多かったらどうしようもないということは、確かにあると思います。ただ、子どもたちがどのように反応するかによって、例えば、50人でも何とか個人指導を入れていける場合もありますし、30人でもなかなか難しいという場合もあるので、その辺はなぜそうなるのかということの、いろいろ研究している方もあるでしょうし、経験なされた方もあるでしょうから、そういう方々から伺っていきたいと思っています。

私自身中等学校の低学年の指導をしていたことがあります。随分昔ですから、いまとは状況が違いますが、50人の生徒を教えていて、50人に一斉授業をしてはおりませんが、結局指導は一人ひとりだという結論というか実感を持って指導に当たっていました。そのことが1つです。

分かる指導をするというのは、そういうところからだと思います。例としてお出しになったような、とにかく100点を取るまで指導をしていくというやり方です。ある子どもは1回で100点を取って、体育でいえば、高飛びで1mを楽に越える子もいるし、1mで引っ掛かって、それを何回も何回もやっているうちに飛べるようになる子もいるし、ある時は飛べてある時は飛べない。5人いれば5人みんな違った成果を上げる。その成功の仕方も一人ひとりみんな違うということ、私自身実感として持っております。そういう意味で個人個人を考えて指導するということが、分かる授業に繋がっていくのではないかと思います。

もう1つは、同じことになりませんが、子どもの頭になって考えるということです。子どもの考え方のプロセスを自分でたどってみて、こうやってつまずいたら、こういうふうにしてみたらどうかということ、子どもの考えるプロセスということ、常に教師としては同感するというか、感じる必要があるということです。それが指導の面です。

もう1つは、子どもに達成感を持たせる。「あっ、分かった、できた。」と。先ほど

の100点満点を取るまでやらせるというのもその例だと思いますが、何度やってもいいが、最後にはある目標を達成したという、達成の喜びを感じさせることが、学校に来て楽しく感じることの1つの要因になるのではないかと考えています。

もう1つ付け加えますと、これは大反対になると思いますが、何とか評価しないで済むようにしたいと思うことです。つまり、点付けをしないで済む。それから内申書を出さないで済むということです。

このことになりましたと、そもそも大学に問題があります。大学が入学試験をやって点数を付けるからで、そこで良い大学に入ろうと、良い大学に入るためにはどこの高校がということになります。そうすると、どこの高校に入るのはどこの中学ということになって、だんだんそれが下に下がる。それが「こんなことを言ったら、先生から悪い点を付けられるのではないか、内申に響くのではないか」と。これは子どもだけではなく、親御さんも随分心配なすることではないか。何とかいままでのような数量化したり、あるいは主観的な教師の評価によって子どもの進路が決められないような方式を、今後は考えていく必要がある。それを考えておられる学校、機関、その他たくさんあるとは思いますが、大体公立などでは、ある一定の方式があって、その方式に従わないと、先生方の責任になってくる。先ほども責任という問題が出ましたが、そういうことになるので、評価についての考え方も少し柔軟にできないかという点です。

その他おっしゃったことは、私が日常感じている、あるいは考えていることと一致するところが多いのですが、もう1つは、先ほどご説明のあった資料の中で、学校図書館の活用というのが割合なされていないのはどういうことかしら、というのが質問です。先ほどの朝礼のときに10分間生徒に読書をさせるという工夫がなされているようですが、それではその準備として学校図書はどうなっているのだろうか、疑問に思いましたので、教えていただきたいとします。

今日のように一応テーマを限ったのですから、委員の大変貴重なご意見も出ておりますが、それは先の機会に是非伺わせていただきたいと考えています。

会長 どうもありがとうございました。どなたかもう一方ぐらいご意見ございますか。なければ一応まとめにしたいと思いますが、学校の授業を、もう少し子どもたちが授業を受けて楽しくなるような人間化という言葉で私はまとめましたが、その中で誰にも分かる授業法の開発ということで、ここにいろいろな方法を書いてありますが、この中でどれを杉並区としてセールスポイントにするかというのは、まだまだ後のディスカッション

ンとの関連の中で最終的には決められれば決めて、そういうものを作りたいと私自身は考えております。

学校の授業をそのようにするためには制度を見直すというところで、委員からは柏市の良いお話を伺いましたので、そういうものが杉並区でもうまくやれるかどうかを、教育委員会のほうでお考えいただければと思います。

何回も申し上げますが、今日ここで何をということをも決めませんが、それは次回からのあと何回かのディスカッションと深くコミットしているものですから、とうていこの中で何というわけにはいかないと思います。

次回は2の「学校制度の人間化、学校の開放化」といったテーマでお話をしたいと思います。委員には是非よろしくお願ひしたいと思います。

委員 前回の最後に聞いたのは、もう1回学校で子どもたちが生きるよろこびいっぱいになるにはどうしたらいいかということをお話し合うことになっていたでしょう。今回、私は来て初めてもらったのですが、今回の会議内容が「学校授業の人間化」、そして次が「学校制度の人間化、学校の開放化」と決まっているのですが、どうして決まったのですか。

会長 私が整理して私の責任で決めました。

委員 それでは、前回話したことと違うではないですか。もう1回やるということだったのでありませんか。私には分からない。だから、こういう経過、次にどういう話になるか私は分からないのです。これは先ほど配られたのですが、何でもありませんよ。前回ももう1回この話をしようということで終わったのではありませんか。

会長 それをするために、私はこれを整理して出してきたのです。

委員 会長の独断で全部決めているわけですか。

会長 いや、独断ということもありませんけれども、先生方から出たテーマを全部この中に入れて作ったのです。

委員 そうしたら、前もって決まっているのだったら、前もって配布してくださいよ。私はここへ来るまで何も知りません。配布されましたか。私はこういう経過を全然知らないですよ。

参事 先般会長のほうから、こういったテーマで次回から続けたいということで事前に委員のほうにはその内容を伝えておいてほしいということで、私は各委員の所へお邪魔して、「こういった内容でと会長がおっしゃっています」ということで、資料はお渡ししてきております。若干その後会長のほうで並び方などをちょっと変えられましたので、今日新しいものは配られておりますが、古いものについては、お邪魔してお渡ししております。委員のところも事務所のほうに。

委員 この前私がもらったのは違いますよ。

参事 事務所のほうにお邪魔して。

委員 ええ、もらいました。だけど、私にはこういうものはありませんでした。

参事 いえ、それは確認してお渡ししてきたところですよ。それは間違いございません。

委員 送ってきたのは第2回の懇談会の内容ですね。

参事 送る前に私が事務所をお訪ねして、会長の指示どおりにお渡しするようというところでお渡ししてきたところですよ。

会長 とにかく一応全体をディスカッションして、そしてまた戻ることになるだろうと思います。

委員 会議するのだったら、「こういう具合に決めましょう」ということで、周知のもとで決めてほしいですね。独断で決められて配布されただけでは困ります。私は正直言って、こういうことは知らないのです。前回はそうです。私は何も知らなかった、遅れて来たのですが。これでは何のための懇談会か私には分からない。進め方も分からない。

会長 折角の機会ですから、傍聴の方の中でご意見をお願いいたします。

傍聴 A 久我山に住んでおります。子どもを久我山小学校、中学校、杉並の小学校、中学校、高校と卒業させまして、PTAにずっとかかわってきました。今日の、学校教育をどうしていくかという懇談会を聞いた感想を述べたいと思います。

実は、先ほどいろいろな話を聞きましたが、「30人がベストなのか40人がベストなのかは教師の力量による」という発言がありました。私は親としては、教師の力量によって子どもたちが、その年は力量のある先生に当たって、次の年は力量のない先生に当たるとするのは、一住民としてというか、子どもの親として、大変困ります。

もう1つは、先ほど女性のPTAの方がおっしゃいましたように、今年は20人学級で来年は41人学級というのは、私は体験しましたが、本当に困ります。子どもがいちばん学校に期待するのは、勉強が面白いと思いたいと思っているのです、どの子も。学校が果たさなければいけない最も重要な役割は、やはり学ぶことが楽しいのだということ、子どもたちに感じさせてほしいということだと思っています。

子どもたち一人ひとりには全く違いがあるわけで、その個性に対応していくためには、どう考えても40人などというのはちょっと。高校のときもそれでクラスが大変荒れたという経験を持っています。先生もヘトヘトです。子どもたちとゆったりと向き合う時間を保証してあげてほしい。部活の問題も、日曜日に出て、夜も遅くまで練習してというのは、1人の社会人として生活されてないような先生に、実際に母親としては大変不安でした。だから、第一に、子どもたちと向き合う時間を先生たちに保証していただきたい。小学校は特に重要だと思います。是非少人数の学級を。地域の自治でしている地域もあるわけですから、きちんとがんばっていただきたいということで、感想を終えたいと思います。

会長 どうもありがとうございました。

傍聴 B 杉並区内の中学校に勤務しております教員です。いま今回の課題というか議題が「学校制度の人間化、学校の開放化」ということで、1番に指定校通学区域の弾力化ということが挙げられています。これについて一言申し上げたいと思って手を挙げました。品川区などでは、いわゆる通学区域の自由化ということで、マスコミではいろいろと

言われています。自由化といった名前を付けられているので、何だかとても良いことのように思われている方がおられるのではないかと、学校現場としては、決してそうではないということを申し上げたいと思います。

会長 それは次回に発言の機会を最後にいたしますので。

傍聴 B 次回当たるかどうか分かりませんので、是非委員の皆さんにそれを考えていただきたいと思うのです。自由化と言っていますが、選ぶほうとしては選ぶ大変さということが問われるのです。選ぶ側の責任も問われることになるのです。選ばせるのではなく、杉並区の教育がどの学校に行っても、質の高い良いものであることを保証していくことが大事だと思うのです。選ばなくても済むような区の教育にしていっていただきたいと思うのです。我々教員としても、いろいろなことをやっていますが、我々の努力を問われるだけではなく、いまの学級の人数なども含めて、そういうことを考えていただきたいのです。

それから、学校の中としては弾力化が問われるということは、選ばれる側として、いろいろ良いことを強制されるというか、例えば、子どもにすれば自分たちがとても良い子で、後輩が入ってくるときに、その学校を選ぶような良い生徒を強制されるし、我々としても良い教育をするように強制されるのです。良い教育というのが見た目で、すごく子どもが落ち着いているとか、教員が特色のあるいろいろなことをやっているなどということによって選ばれるように努力させられると。それは良いことと思うかもしれませんが、選ばれる側にいる学校現場の子どもたち、教員からすれば、自分たちが楽しいなどということではなく、選ばれるために何かを強制されることになると思うのです。だから、自由化とか弾力化ということですが、いろいろ比べられる子どもたち、ほかの学校と比べられる、どこが良いかと選ばれるということです。比べられる子どもたちの緊張とか苦痛なども考えていただきたいと思います。次回、是非そのこともお考えの上で討議をしていただきたいと思います。

会長 どうもありがとうございます。それでは時間がまいりましたので、これで終わりにいたします。

次回の第4回は7月4日6時半からです。第5回の日程を決めたいと思いますが、7月下旬、8月上旬にかけて事前に事務局から問い合わせがあったと思いますが、いかが

でしょうか。

副参事 7月31日は1人の欠席で全員が集まれることになっています。

会長 7月31日が第5回ということになります。それでは、今日の懇談会を閉会にいたします。どうもありがとうございました。